

## 8月18日(火) 午前中 フランクル・センター訪問

ホテルの近くから市バスに乗ってマリアンガッセ1番地に。階段を上ると、フランクルが1945年から晩年まで住み、今もエリー夫人が住むアパートメントがあり、同じ階にフランクル・センターもある。以前センターだったところは、今年3月フランクル博物館に生まれかわり、センターは新たに購入された残りの2階部分に移転された。(写真右：建物入口)



フランクル博物館を訪れると、まず力強く登山をするフランクルが出迎えてくれ(写真右上から二番目：受付風景)、フランクル・センター所長のシェヒナーさん、館長のデル・コルロスさん、事務局長のブライトウィザーさん総出で暖かい歓迎を受けた。シェヒナーさんからは「この博物館は、日本の皆様の援助なしには完成できませんでした」と感謝の言葉を頂き、「人間の様々な問題の重さと、フランクルの哲学的な明るさを一体的に示す」という博物館の設立意図が説明された。(写真下左：シェヒナーさん)



最初の部屋には、実存的課題が8つのパネルに表示されており、パネルを裏返すと解決のヒントが示されている。

そのうちのひとつのパネルを用い、フランクルがユダヤ人病院勤務時代に患者を観察したことから「その人が誰かや何かのために生きようとすれば、トラウマから自由になれる」ことが説明された。(写真下中央：第1室のデル・コルロスさん)

二つ目の部屋はとても小さい。ここは、「私たちは地面の上に立っており、様々な生物学的な制約があるが、3次元的に上に向かっていくことができる。どのような制約を持っていても、自分で超えることができる」ことを感じるための部屋だ。(写真下右：二つ目の部屋の床)



三つめの部屋（写真：右）は、どうやったら自分の制約から自由になり、意味のある人生を送ることができるかを考える部屋となっている。

フランクフルトは、意味のある人生を送るための三つの道考えた。つまり、創造価値、体験価値、態度価値である。入って左手には、フランクフルトの遺品が三つの道に分けてガラスケースの中に並べられている（写真右上から2番目：体験価値の品）。



あとの3面の壁にはそれぞれの道ごとに三つか四つのボックスがある。白を基調として、ライトグリーンとオレンジでアクセントを効かせた、温かみのある空間だ。

その内の一つ「目には目を」のボックスの扉を開くと、ドミノ倒し式に倒れる棒をどこかでしっかり支えれば、報復の連鎖が断ち切られることが示されていた（写真上から3番目）。



「天国か地獄か」のボックスには、柄の長いスプーンが入っていて、ゼミでも聞いた天国と地獄の違いが説明されていた（写真上から4番目）。



天秤の示されたボックスの前では、罪を犯した対象の人や物に対して贖うことができなくなっても、他の人やものために何かすることで贖えることができるし、それができなくても、死の床で自分を変えることができることを説明していただいた（写真下）。



四つ目の部屋には、人格についての10の考察が掲げられている。ロゴセラピーに関する世界中の書籍も展示されていた。

センターの展示は、訪れた人が「体験」しながらロゴセラピーに触れる工夫が随所に施されており、好奇心を刺激するユニークな工夫からは、ユーザー好きなフランクフルトの人となりさえも感じられた。実際に触れたり、動かしたりする中で、「ああ、こういうことか。」と合点すると、より印象的なものとして記憶に残る。楽しむうちに学んでいる、そんな空間だった。



用意してくださったシャンペンと美味しいチョコレートを味わいながら談笑していると、ビッグニュースが飛び込んだ。なんとフランクフルト夫人のエリーさんが私たちを特別に自宅に招き入れ、見学を許可してくれるというのだ！

エリー夫人（写真右）が出迎え案内して下さった室内は、余計なものが無く、シンプルなデザインの家具が整然と配置されていた。部屋の所々に فرانクルの肖像や写真が飾られており、それらから、フランクルの息遣いが感じられた。



玄関ホールを抜けた応接室の左手には、フランクルが晩年まで過ごしたベッドとデスク（写真上から2番目）、「苦悩する人間」（写真上から3番目）の像が飾られた書棚のあるフランクルの部屋がある。また右手にはフランクルが世界中から贈られた学位証明書、感謝状、ここを訪れた著名人の写真などが壁一面に飾られた部屋がある。フランクルの部屋の奥には、日本の浮世絵やエゴンシーレの絵が飾られ、フランクルがエゴンシーレのファンだったことを知った。



フランクル宅の訪問は、ほんの十数分だったが、エリー夫人は部屋を一つ一つ周り、フランクルとの思い出をお話して下さった。フランクルのことを話す時の夫人の表情は柔らかく、愛情に満ちていた。

エリーさんに一人ひとり握手してもらってフランクル邸を出て、今度はフランクル・センターへ。



ここには、フランクルの生涯やロゴセラピーについてのパネルが懸けられた部屋、講演会やセミナーを開くことのできる部屋があり、ここでブライトウィザーさんに記念撮影してもらった。

休暇を返上して私たちを迎えてくれたお三人に、日本の陶磁器のお土産を渡し（写真下左：ブライトウィザーさんとシェヒナーさん）、センターからも私たち一人ひとりに、フランクルの写真やボールペン、ウィーンのお菓子などのお土産をいただき、センターを後にした。センターの斜めむかひの、フランクルが働いていたポリテクニックのあった建物（写真下中）の前を通り、その隣にできたヴィクトール・フランクル公園（写真下右）を覗いて、解散した。（TY, YN, HN, YO & JH 記）

